

### Ⅲ 3. 4) 親のエンパワーメント

誰かを支援するとは、相手に何かをやってあげることではない。本人自身が力をつけ、自分の力でやっていけるように支援することが求められる。親がエンパワーされること、そのためにできそうなプログラムを2つ提案する。

#### (1)親による自主企画講座

##### 趣旨

基本的に一回完結型の講座で子どもにも参加するプログラムである。子育て中の親たちは、子どもの体調や家庭の都合により連続しての受講が困難な場合が多く、途中からの参加を容易にするための配慮による。また、自分の興味関心に合わせ、親自身が講座を選択できるようにする。

親子での参加は、子どもを預けることに抵抗がある人でも気軽に参加できると同時に、保育のための費用や人件費が不要であることから、プログラムの実施自体を容易にするものである。

講座の内容によって保育が必要な場合は、参加者である親同士が交代で保育を担当したり、保育ボランティアを募ったりするものとする。

##### 目的

親の子育て力を高めるためには、親自身も子育てにおいて自己充実感を持つことが大切である。子育て中の親が講座に参加することにより、子育てに関する知識や技能を学ぶだけでなく、仲間と交流し、活動する場を得るための機会とすることを目的とする。

専門的な知識や技術を持ちながらも子育てのために第一線を退いている人を講師とすることで、講師自身が社会復帰や再就職を意識する機会にもつながる。企画運営を親たちが行うが、一人の社会人として地域貢献を果たすことにもなる。

##### 実施方法

###### ①対象

主に子育て中の母親、父親を対象としているが、子育てに興味関心のある人すべてに開かれたものとする。

参加者同士による話し合いを円滑に進めるためには、数名～20名ほどの人数が適当と思われる。

###### ②開催日時

1～2ヶ月に一度、平日の午前中1～2時間を目安に開講する。

###### ③募集

ひろばの利用者を中心に参加者を募る。また、参加を募る案内チラシを、公民館や子育てひろば、小児科、子ども服店等に置かせてもらうなど、利用者が身近な所から情報が得やすいよう配慮する。

ホームページやメールといった情報ツールを使っての周知も有効である。

###### ④必要経費

参加費は100円～300円程度。参加者に負担がかからない額であること。この経費から、当日の資料やお茶を用意する。

###### ⑤講座のテーマ

実際に子育てをしている当事者の視点を大切にする。それはすなわち、参加者にとって興味関心の高い内容となるからである。「子育ての意識や能力を高める」ことのみにとらわれず、「子育て中だから知りたいこと、子育て中でもやりたいこと」を実現するための趣味と学習の講座となるようにする。行政が主催する母親学級や家庭教育講座とは異なる性質のものである。

###### ⑥展開例

講師による話題提供から、参加者によるグループトークや参加者全体での話し合い、講師によるまとめという流れが考えられる。講師自身も同じ子育て中の親であることから、参加者が気軽に意見や質問を出しやすい雰囲気で行進することが望ましい。

具体的なテーマとして「子育ての悩みを語ろう」「幼稚園・保育園入園準備」「おじいちゃんおばあちゃんとの付き合い

講座」「アトピー、喘息どうしてる?」「子どもと作るおなべのケーキ」等が挙げられる。

#### 留意点

①基本的には、参加者である親たちが講座を組み立てるが、コーディネーターはスタッフが行うことが望ましい。企画や周知のための広報活動、講師の手配や当日の準備を親たちが分担して行えるようなコーディネーターが必要となる。

②講座自体は親同士の学びあいが基本であるが、専門的な見解を持つスーパーバイザーとして関わられるスタッフの存在が必要と考える。

③場合によっては、参加者へのアンケート調査を行い、実施して欲しい講座のニーズや、講座の感想を常に把握することも必要となる。

④企画や講師については、特定の宗教や政治団体との関係性のないもので非営利であることに留意しながらコーディネートをするよう心がける。

#### (2)グループワーク

—「ノーバディズ・パーフェクト」を応用して—

Ⅲ 1. 3) で紹介したカナダの「ノーバディズ・パーフェクト・プログラム」は親の子育て力を高める優れたプログラムである。しかし、それをそのまま行うことは、場所やスタッフ、時間の確保、親が6回なり8回なり連続して参加することなどにより、実施が難しいのが現実である。

応用編として、みずべ等で行っている簡略化したプログラムを提案する。参考資料として『ノーバディズ・パーフェクト・シリーズ』と『父親』を準備、必要に応じてテーマに沿った資料や情報を揃えて提示すると、学びの参考になる。

#### 目的

日ごろ気になっていること、困ってい

ること、考えてみたいこと、人と話し合ってみてみたいこと、疑問に思っていること等々、人はいろいろな悩みや課題を抱えて生活をしている。

子育てひろばなどで、親に関心やニーズのありそうなテーマを設定し、そのテーマに集まった親のグループで大人同士で話しあいを行う。悩みを話し、聞いてもらって気持ちの整理をする、また人の話からいろいろな知恵やアイデアをもらい、自分の課題解決に参考となるヒントを得てもらうことを目的とする。

#### 実施方法

##### ①テーマの設定

子どもとのかかわり方で「反抗期の子どもと向きあい方」「上手なしかり方であるの?」「食事について」など。家庭内の人間関係で「子どもと気持ちが通じあうコミュニケーション」「お兄ちゃんお姉ちゃんとの向きあい方」「パートナーとのコミュニケーション」「おじいちゃん・おばあちゃんとの関係」など。親自身について「お父さんの子育て」「私ってどんな人?」など、親の関心が高そうなテーマとする。

##### ②時間と回数

1回の時間を1時間半から2時間とする。1テーマについて同じメンバーで話しあいを続け、変化しながら気づきを得ていくために、連続3～4回のシリーズとする。

##### ③人数と募集

テーマと開催の回数とその日時を示して、参加者を募集する。8人程度、3～4回のシリーズに出席できる人が望ましい。

##### ④託児とその担当者

親同士がゆっくり話すために託児を行う。親から子どもの状態、希望することを記入してもらい、できれば1対1に近い担当者をつける。受け渡しは丁寧に行い、終了後には託児中の子どもの様子を伝える。連続講座なので、回ごとに同じ子どもに同じ担当者がつくことが望まし

い。地域のボランティアにも協力を依頼して託児の担当者を確保しておくとうい。

### セッションの進め方

セッションを担当するファシリテーターが進行を務め、次のように進める。

#### ①アイスブレイカー

初めに、互いに知りあい緊張をほぐすために、自己紹介を兼ねて「私の好きな～」「私を～に例えたら」など、「私」をテーマにした簡単なコメントをそれぞれにしてもらう。初めて会うもの同士でも、声を出すことによって、その後の参加や発言がしやすくなる効果が期待できる。

#### ②決まりごと

セッションに安心して参加できるように約束事を決めておく。まずはここで出た話はここだけのこととしよう、と安全な場を提案して参加者の了解を取る。

そのほか参加者が不安に思っていること、みんなに頼んでおきたいことなどを出してもらう。出された項目はみんなの合意事項として大きな紙に書いて張り出しておく。次回以降にも張り出して、追加項目が出れば書き足していく。

#### ③テーマの展開

最も時間を使う、中心となる活動である。決めてあったテーマについて、思っていること、困っていることを、話したい人から自由に話してもらう。順番や、指名によって話してもらうことは避けて、話したような人が自発的に話すのを待つようにする。

話し合いだけでなく、テーマについて考える機会を提供する、たとえば出てきた話の場面をロールプレイで演じてみる、実際の子育て場面を検証する項目を考える、考えの似たもの同士が小グループになって話しあい、元のグループに戻って発表するなど、さまざまな活動を入れると、互いの気づきや学びを深めることができる。

話が行き詰ったとき、判断に迷うときなどに、「ノーバディス・パーフェクト」のテキストを開くと、子育てのヒントや

話し合いの新しい展開を得ることができる。合間にお茶の時間を入れると、ほっとした雰囲気を作ることもできる。

#### ④要約とふりかえり

ファシリテーターは話し合われたことや活動を要約して伝える。出てきた話から、何をとりかはそれぞれ参加者の判断に任せるために、結論は出さない。

参加者に、セッションに参加して感じたこと、ヒントになったことなどを発言してもらう。あまり発言のなかった人にも興味のあるようなことで話せる機会を作るようにする。家に帰って実行してみたいことについても話してもらう。

#### ⑤フォローアップ

二ヶ月後に電話を入れ様子を聞き、必要に応じて対応する。

#### 留意点

①この懇談に参加して、なんとなく分かった、よかったとするのではなく、何を感じ何を得たのかを、最後に言語化することで自覚してもらうことが大事である。その上で、実行してみたいことも自分が表明することで、実行することにつながりやすくなる。

②結果から何をとり、何をするかについては個人が選ぶことであって、発言においても強制しないことが必要である。

③ファシリテーターは参加者に付き添う人であり、参加者を中心に据えて指導的にならないよう、気をつける必要がある。

参加者が話しやすい雰囲気をつくり、一人ひとりの話をよく聴くことが大切である。耳で聞くだけでなく目でもからだでも、こころでも聴く姿勢が求められる。④聴くことが中心ではあるが、合間に自分の経験が役に立つと思われるときには、話しても構わない。ヒントや情報を提供するとしても、結論や答えをだすことは控える。

⑤ファシリテーターは、自分自身のあり方が問われる立場であることを自覚して、つねに研鑽を積むことが求められる。

### Ⅲ 3. 5) 父親支援

#### (1) 企業との連携プログラム

##### 趣旨

アンケートの結果からもわかるように、多くの子育て当事者が、父親の労働時間の短縮や育児休暇の充実、あるいは父親の意識改革を求めている。また、子育て支援者のアンケートからも、ひろば等における父親参加のプログラムを計画してもなかなか参加してもらうのが困難な状況もあげられていた。この実態を変えるためには、男女の働き方の見直しや、社会一般の子育てに関する見方（特に男性）など、個々人のあり方と共に各団体や企業の抜本的な変革が必要なのである。そこで、ひろば等内における父親参加型の支援のみではなく、企業との連携プログラムをここに提案する。次世代育成支援の推進のための行動プログラム策定の中にこの連携プログラムを位置づけ、子育て当事者の声が反映される企業作りに生かしてほしい。

##### 目的

企業内において、子育て中の親世代が懇談する場を設置し、第三者の関与によって、その声が具体的な働き方の見直しに結びつくようなシステム作りを行う。また、親世代が父親が子育てに主体的にかかわることの意義について学ぶほか、子育てについてじっくり考える場を提供する。

##### 実施方法

###### ①対象

乳幼児期の子どもをもつ男女職員。

###### ②日時・回数

年に数回、それぞれ3回程度連続して行う。できれば、1回に2時間程度確保できることが望ましい。

###### ③プログラム実施協力までのプロセス

子育て支援団体が各種企業に働きかけ、

このプログラムの理解と協力を得る。当初はモデル事業として行うことや、企業における次世代育成の行動計画の中に位置づけるような働きかけを行っていく。「育児する父親にやさしい企業」が評価されるなどのメリットがあれば、企業側から実施希望が子育て支援団体にあり、コーディネーターの要請があることも考えられるであろう。

###### ④内容

子育て中の男女職員が集まり（役職者を含めるかどうかは要検討）、子育てと仕事の両立についての懇談を行う。そこに、ファシリテーターとして子育て支援者が参加する。連続して数回の懇談を通して、現状および課題を理解し、働き方に関する具体的な改革案を話し合う。その改革案を踏まえ、管理職クラスとの懇談を行う。そこには、懇談会に参加したコーディネーターに加え、子育て関係の有識者が加わり、企業の実態も踏まえ、子育て世代にやさしい企業であることのメリット、先進事例の紹介などを含め、具体的な改革案を模索する。

###### ⑤テーマ

懇談のテーマは、育児と仕事の両立の話題のみならず、子育ての悩みや喜び、保育園生活、学童保育等のテーマもある。

###### ⑥人数

じっくり話を聞くためには、7～8人程度が望ましい。男女がある程度バランスよく参加するよう工夫する。

###### ⑦進め方

・基本的な進行は外部の子育て支援スタッフのファシリテーターが行う。それが不可能であれば、職場内でのリーダーの参加を仰ぐ。その際そのリーダーとの子育て支援スタッフの事前打ち合わせを行い、参加者が本音を言いやすい雰囲気作りに配慮する。  
・この基本的な進め方は、4) 親のエンパワメントのグループ懇談の進め方を参考にする。  
・初めに、自己紹介を兼ねて自分の子ども

の特徴などを紹介してもらうなど、互いが相手のことを知り合い、参加者の緊張をほぐすことに努める。

- ・ここで話された個別のケースなどは基本的にはここだけの話としようなど、安心して参加し、発言できるような決まりごとについて確認する。そのほか、参加者が不安に思っていることなどを出してもらい、共通理解を行う。

- ・決めてあったテーマについて、思っていること、困っていることを、話したい人から自由に話してもらう。できるかぎり、自分から主体的に話すように進行する。

- ・ファシリテーターは話し合われたことや活動をふりかえり、要約をして伝える。出てきた話から、何をとるかは、それぞれ参加者の判断に任せるために、結論は出さないが、職場の実情に関しては、どのような課題があるかを整理する必要がある。その上で、具体的な改革案を導き出す。

#### ⑧展開例

- ・第1回は、自己紹介を行う中で、子どものプロフィールや子育てで感じていることを自由に話してもらう。特に、一人ひとりが自分の子育てをリラックスして話せることに留意して進める。

- ・第2回以降は、仕事と育児の両立というテーマで話す。自分の子育ての実情に対して、職場での働き方がふさわしいものとなっているかを話し、そこからどのような改革案が考えられるかを議論する。

- ・改革案の提案に導くだけでなく、子育てに関する悩みや共通の話題がある場合は、そのことで懇談を進める。

- ・職員による改革案を通して、管理職クラスとの懇談会を行う。そこでは、子育て関係の有識者にも参加してもらい、広い視野から子育て世代にやさしい企業のあり方を考える場とする。

#### ⑨フォローアップ

その後、具体的な改革への取り組みがあり、その具現化にかかわることが可能であれば、関与する。改革案にはつながらなく

とも、懇談会の活動が継続できるよう働きかけを行い続ける。

#### 配慮点

- ・企業内でのことであるので、プライバシーの問題や一般職員にとって不利益などが起こらないよう、企業側との綿密な打ち合わせが必要である。

- ・社会貢献部や労働組合等積極的に関わる部署とのつながりもふくめ、企業内にもキーマンが必要である。

- ・懇談会にかかわる子育て支援団体のスタッフはファシリテーターとして必要な高いレベルの研修を受けたものが望ましい。

### Ⅲ 3. 5)

#### (2) 父子体験プログラム

##### 趣旨

多少の変化はあるものの、男性は女性と比較して、育児や家事にかかわる機会が持ちにくく、主体的なかかわりが持ちにくい実態がある。また、現代の親世代は、育児体験、遊び体験、自然体験、日常的な生活体験が大きく欠如していると言われる。そのため、父親が子育てにかかわるためのきっかけとなるためのプログラムを提供する必要性は非常に大きい。中でも、父と子が一緒に手や体を動かしながら活動する体験型のプログラムは比較的参加がしやすく、そのニーズもある。そのため、様々な種類の父と子の体験プログラムの提供がとても有効であると考え、ここに提案する。

##### 目的

父親が子どもと共に体験活動に参加することを通して、子育ての喜びを体験し、子育ての主体者としての意識を育てる。

##### 実施方法

###### ①対象

乳幼児とその父親

###### ②日時・回数

土曜日、日曜日の開催。午前中2時間程度が望ましい。父親のみのプログラムの場合、夜の開催が望ましい。できれば、1回限りのイベントとせず、何回かの連続プログラムにすることも望ましい。

###### ③人数

活動内容や場所の広さにもよるが、ひろばで行う場合、10組程度が望ましい。

###### ④募集方法

随時、ひろば等の掲示板やちらしで募集を行う。

###### ⑤経費

材料等にかかわる実費を払ってもらう。

###### ⑥実施までのプロセス

開催日時の調整がついた後は、実施にあたって、子どもと一緒に参加するのか、夫婦で一緒に参加するのか、父親のみなのかを実情や目的に合わせて考える。

###### ⑦活動例

- ・お父さんと遊ぼう  
(親子でふれあい運動遊び・ベーゴマ、剣玉、缶けりなどの昔遊び・わらべうた等)
- ・男の料理  
(簡単離乳食・野外料理・うどん打ち等)
- ・木工で創作  
(子どものおもちゃを作ろう・ひろばの環境整備、日曜大工の日等)
- ・ケア講座  
(ベビーマッサージ・タッチケア・沐浴、入浴体験)

その他、具体的な活動については、様々なスタイルが考えられる。しかし、まずは父親たちにとって楽しめるものであり、物理的な環境や人材などの面から考えて実施可能な内容を考えていけるとよい。

###### ⑧活動の進め方

- ・受付をすませたあと、父子で名札を付け、他の参加者から名前がわかるようにする。
- ・イントロダクションとして、父子でできる簡単な手遊びや体操をしたり、父子でコミュニケーションをとり、表情が柔らかくなるようにする。
- ・活動の手順を説明し、これから楽しそうな活動が始まることへの期待感を持たせる。
- ・グループ分けが必要な場合は、簡単な自己紹介し、役割分担ができるように配慮する。
- ・うまくいかない父子やグループがある場合は、それとなくフォローする。単にやってあげてしまうのではなく、自分でできたという達成感が持てるようなサポートを行う

う。

- ・父子が一緒にする活動の場合は、子どもが父親のしていることを手伝ったり、父親の取り組む姿に関心が持てるようなサポートを行う。
- ・夫婦で参加している場合など、できるだけ父と子どもが主役になるようなサポートを行う。
- ・活動や片付けなどを通して、父親同士が協力し合ったり、会話が生まれるような工夫を行う。
- ・片付け後に、みんなにちょっとした感想を聞くなどして、思いを共有する。

#### ⑨コーディネーター

コーディネーターは参加者数に応じて、ひろばスタッフが数人。できれば、3～5組の父子に1人のスタッフが入ることが望ましい。

#### ⑩フォローアップ

開催後には、後述の「父親サークル活動」のようなものに移行していくことも可能である。しかし、あまり、それを強調せずに自然なかたちで望む必要がある。

#### 留意点

- ・実施側のみで企画を考え進めるのではなく、なるべく日常の中で父親との接点を持ち、意見を反映させていくことが必要である。講師についても、父親の中に優れた力をもつ者もおり、そうした力を発揮してもらうことも大切である。
- ・もっとも大切なことは、父と子のコミュニケーションは図ること、父親が活動を楽しむことである。そのため、父親自身が自分でやり遂げた実感が持てたり、子どもと父親がかかわりあえること、父同士でつながりが生まれることである。そこにスタッフの役割がある。
- ・日常的に職場での地位や肩書きを通してのコミュニケーションが中心となっている父親の場合、あまり社交的ではなく、

声を掛けられても話しが続かない場合が多い。ただし、慣れてきて身も心も解放されてくると、次第に饒舌になる人も少なくない。そのため、スタッフが積極的に声をかけ、意識的に他の人とつなげていくようなかかわりが必要となる。

- ・スタッフにも男性が入っていることが望ましい。難しい場合には男性のボランティアが有効となることも多い。
- ・参加者の中で、ひろばにとっても関心を持ってくれた方、様々な特技などを持っている方などには、様々な場面でのひろば活動への参画を呼びかける。声をかけられることによって、協力してくださる方も少なくない。このようなプログラムへの参加をきっかけに様々な地域のつながりに結びつけていくことも大切である。

### Ⅲ 3. 5)

#### (3) 父親サークル活動支援

##### 趣旨

父親は母親と同様にひろばに集い、交流を図ることは困難な状況がある。しかし、何か父親自身が楽しめたり、父子で活動できるプログラムへの参加率は高く、そのニーズもある。ただし、父親の活動の場合、単発のイベント型が一般的であるが、この父親サークルは、父親同士がある目的をもってサークルを形成し、継続的に活動を進めることが大切である。

父親自身が楽しめる活動であると同時に、子連れで参加できる活動であることが望ましい。(母親のリフレッシュの時間にもなる)この交わりを通して、父親のかかわりを深め、子育てネットワークを生み出す契機となる試みとして、この父親サークル活動プログラムを提案する。

##### 目的

父親同士のサークル形成を支援することにより、父親同士のつながりと継続的な活動を生み出し、家族や地域の中で主体者としての父親役割への意識を高める。

##### 実施方法

###### ①対象

ひろば利用者の夫のみならず、地域の子育て家庭に呼びかける。ただし、子どもの年齢によってもその話題等が異なるということもあるため、まずは3歳未満の子どもがいる家庭を対象にする。

###### ②日時・回数

日時は、サークルメンバーで決めればよいが、土日の月1回程度の活動が無理がないものと考えられる。ひろばが空いている時間帯を活用するのもよい。

###### ③募集方法

子育てひろばを通して、募集する。

###### ④活動例

活動内容は何か1つにしぼって行うケースと、多様な活動を行うケースが考えられる。活動例としては、次のようなもの

のが考えられる。

- ・子ども向けのお父さん劇団
- ・子ども向けのお父さんバンド
- ・絵本の読み聞かせ
- ・お父さんクッキング
- ・父と子の自然探索クラブ

その他、様々な活動が考えられるが、これらの内容の基本は父親自身が楽しめ、子連れで楽しめるものが望ましい。

###### ⑤コーディネート

この父親サークル活動を支援するひろば担当者は、活動がうまく行われるよう側面的な支援を行う。具体的には活動の場の提供、サークル活動参加者募集の手伝い、活動の活性化の相談、他のサークルや関係機関との連携やイベント参加のコーディネート等がある。基本的にはサークルメンバーの自主的な運営が基本ではあるが、サークルが維持され、ひろばや地域、他の団体などとのつながりが生まれるような支援を必要とする。

##### 留意点

この活動を通して、父親自身が楽しめ、父親同士の交流の深まりが生まれることが大切である。また、父親だけが楽しむのみならず、子連れ参加原則で行うことにより、子どもにとっても楽しい時間が過ごせる工夫も必要となる。父親同士、父子の交わりを通して、父親が子育てを積極的に行うことの喜びを感じたり、父親としての役割意識を高めることが最も大切である。

さらに、この活動を地域の親子に発表するようなイベントを行うことによって、地域交流の活動にもなりうる。

この活動を行うことが、父親にとってだけではなく、子どもにとって、母親にとって、共に充実した時間となるよう留意する必要がある。子どもが退屈なだけの苦痛の時間を強いられたり、母親が子どもを見ている時間になるなど、父親の楽しみの犠牲にならないような工夫が求められる。

### Ⅲ 3. 5)

#### (4) 父親の育児座談会

##### 趣旨

父親も母親と同様、育児に関わることで、喜びを感じると同時に悩みも生じる。そこで、父親も気軽に育児のことについて話し合い、他の人の意見や実際の子育ての姿を知ることによって、相互の学びあいを行うことが必要である。父親は子育てのことについて意識的に話す機会が少ないため、このような場を提供することの意味は大きいと考える。

##### 目的

父親同士が育児の座談会を行うことを通して、他の父親の育児の仕方や考え方を知ると共に、自分の育児を振り返り、その見方、考え方を広げ、父親としての意識を高める。

##### 実施方法

##### ①対象

ひろく地域の家庭に呼びかけることも必要だが、現実的にはひろばに集まってきている親子が対象となる。父親が参加している場合には声をかけ、また母親から声をかけてもらう。子どもの年齢はあまり限定しなくともよいが、主に0歳から2歳くらいまでの乳児が中心となる。また「0歳の子どもをもつ父親」など、子どもの年齢を限定した対象の持ち方もある。

##### ②日時・回数

父親プログラムに共通のことだが、平日開催は難しいので、土曜、日曜か夜間の開催が望ましい。できれば、1回限りではなく、3回くらいの連続的な座談会を設定することが望ましい。ただし、あまり負担に感じてしまってもいけないので、最初から連続とせず、1回目を開催した様子から2回目を設定するのもよい。参加者がもう少し話したいような雰囲気になることが重要である。

##### ③参加者数

話し合いの人数は、あまり多くなりすぎても話ができず、少なすぎても話が行き詰ってしまう。5人から10人程度を目安として参加を募る。

妻や子どもも一緒に参加するような形態にするか、父親だけにするかは、参加者や場の実態やその回の目的に応じて検討する。

##### ④テーマ

はじめからテーマを設けてもよいが、講義形式ではなく、参加者による話し合いのプログラムであるということは確認しておきたい。テーマを設ける場合、次のような例が考えられる。

- ・父親の子育て
- ・子どもとのつきあい方
- ・子育ての悩みと喜び
- ・男の子、女の子
- ・ほめ方、しかり方 等々

##### ⑤活動の進め方

- ・受付をすませたら、まずは名札を付け、他の参加者に名前がわかるようにする。
- ・父と子どもと一緒に座談会に参加する場合は、簡単な手遊びや赤ちゃん体操などを行い、なごやかな雰囲気を作る。父子が同室の場合、ある程度、話し合いにじっくり取り組めるよう、部屋に保育者を何人か配置することが望ましい。子どもがいない場合に子どもの遊びをして表情を和らげるのもよい。
- ・自己紹介を行い、どのような参加者がいるかを互いに知る。子どもの年齢や名前の由来などについて話したりする。
- ・続いて、自分の子育てについての関わりや思いを話してもらうことがよい。父親の場合、その話の切り口がなかなかつかめないうちも多く、ファシリテーターは具体的な話題を振ったりしながら（「こんなことって、ありませんか？」等）、和やかな会話が進むよう配慮する。
- ・話の論点が少し見えてきたら、「他の方はどのようにされていますか？」など参加

者それぞれの育児のやり方や考え方が出されるように投げかける。

- 最後に、どのような意見が出されたかをファシリテーターは簡単に要約を行い、振り返る。ここでは、結論を出すことが目的ではない。
- 参加した感想を簡単に書いてもらうなどして、今回の評価を行い、次の開催のあり方についての参考とする。
- 連続で話し合いが出来る場合には、テーマを設けたり、ゲストを迎えたりといったこともいくつか考えられる。また、今回、共有された話題や課題となった話があった場合には、「また次回、その話の続きをしましょう」などと次回につなげることも考えられる。

#### 配慮点

- 参加する際には、妻に背中を押されたり仕方なくといった姿が多いのも事実であるが、まずは責めない姿勢が求められる。父親自身も「あまり子育てには関わっていない」といった自覚がある人も多く、「指導されるのであるならば嫌だ」といった意見も聞く。参加したがいらない人への配慮も必要で、妻としては誘ってみたがそっけない返事で、まったく関心がないといった場合も多々ある。そうした時も夫婦参加のプログラムや子どもと一緒にプログラムなどたに多様な選択肢がもてるような配慮をしていきたい。
- 参加にあたっては、女性から参加したいという要望がある場合もあるが、話しあいのメンバーとしては男性に限ったほうが話しやすいという意見もある。そうしたことは直接参加のメンバーに投げかけて聞いてみることもよい、話しあいのひろがりとなる場合がある。
- 参加者の中で、子育てにかなり積極的にかかわっている方と、そうではない方の差は非常に大きい。ファシリテーターは積極的な方にとっても、そうではない方にとっても参加してよかったと思えるような進め方が必要となる。特に、あま

り積極的ではない方には、そのなかなかかかわれない実情を受け止めたりすることも大切である。そうすることで、劣等感を感じずに他の方の子育てへのかかわり方を自分なりに受け止められ、「やってみよう」という思いにもなる。

- ファシリテーターについては、男性でも女性でもかまわないと思われるが、他の話あいプログラムと同様に、責めない姿勢や背景の理解などとあわせて、父親たちの具体的なかかわりについて話題提供ができたり、共感ができる人材が望ましい。
- この座談会への出席を通して、父親同士のつながりが生まれるような配慮もとても重要となる。

### Ⅲ 3.

#### 6) 地域異世代交流

##### (1)赤ちゃんとのおふれあいプログラム

###### 趣旨

現代は、少子化、核家族化、地域の異年齢の子ども集団の喪失等によって、子どもや若者が自分よりも若い子どもに触れたり、世話をする機会が失われている。そのため、子どもや若者が赤ちゃんと直接触れ合う体験の場を意図的に提供することが必要である。

###### 目的

触れ合いを通して、共感的に赤ちゃんの内面や発達を理解したり、親子関係を振り返ったり、将来の大人像を育てるなどの経験をし、現在の自分自身の内面の育ちをはぐくむとともに、次世代の子育て者を育成する目的でこのプログラムを提案する。

###### 実施方法

###### ①対象

参加者は、幼児(5歳年長児)、小学生、中学生、高校生、18歳以上の大学生やこれから親になる世代が考えられる。主に、小学生、中学生が対象になるが、それ以外の世代にも意味がある。幼児(特に5歳児くらい)にとっても、赤ちゃんに触れる経験が大切であり、特に交流の少ない幼稚園児を対象とすることも有効である。また、高校生や18歳以降の若者に実施する意味も大きく、自分が親になることも想定した内容での実施がふさわしい。

赤ちゃんは0歳児が望ましい。0歳児は劇的で感動的な発達が見えることから、最もふさわしいと考えられる。また、日常的なひろばに参加する形態をとる場合、0歳児に限らなくてもよい。

###### ②日時

学生と親子が参加しやすい時期を検討する。学校がない日であるとすれば、土曜日開催が行いやすい。

###### ③実施場所

このプログラムは基本的にひろば内で行うことを基本としている。あるいは、ひろば担当者が学校、幼稚園等に出張して実施することも考えられる。

###### ④実施形態

その実施の形態は、ひろば内か外か、あるいは対象年齢等によって、日常的な学生のボランティア的なふれあいの中で行われる形態と、時間を区切った一斉活動形態で行われるケースが考えられる。そのため、ここでは2つの形態の提案を行う。

特にひろばで行う場合は、学校の授業で行うプログラムとは異なり、学生がボランティアとして参加し、赤ちゃんと一緒にふれあう中で行う形態がふさわしい。そのため、学校型の一斉プログラムに加えて、ひろば型の自然なふれあいの延長線上にあるプログラムを提案する。

###### ⑤募集

ひろば内で行う場合、協力親子は、ひろば利用者等に広報し、趣旨に賛同してくれる方をお願いする。参加者の数にもよるが、親子が複数組いてもよい。(赤ちゃんは体調を悪くすることもあり、複数組いた方がやりやすい場合もある)

学生の募集は、担当教員を通して、学校に広報する。

###### ⑥プログラムの柱とポイント

このプログラムは、以下の4つの柱から成り立っている。

- ・赤ちゃんを対象(2ヶ月頃からのスタートが望ましい)
- ・同じ赤ちゃんの成長過程を継続して観ることが望ましい。
- ・深い人間関係を体験するために、同じ赤ちゃん、同じ仲間、同じ実践者で継

続的に行うことが望ましい。

- ・参加者は同じ地域に住む人々で構成することが望ましい。

また、大切にしたいポイントは以下の通りである。

- ・赤ちゃんの気持ち、参加者の気持ちに焦点を当てて行う。
- ・育ちゆく生命、五感と脳を育てることの大切さを学ぶ。
- ・愛情ある親（養育者）と子との関係をふりかえる機会をもつ。
- ・将来の大人像を育てる。
- ・参加者の自発性、主体性を尊重する。
- ・赤ちゃんの安全と衛生への配慮

#### ⑦コーディネーター役

実施するスタッフは必要な研修を受けた者が行う。進め方は、必ずしもマニュアル化された方法に頼り切るのではなく、その趣旨に逸脱しない範囲で、親子や参加者の状況を踏まえながら柔軟に進めることが望ましい。

#### ⑧プログラム例（一斉形態の場合）

一斉形態の場合、以下のようなプログラムが考えられる。回数はここでは5回としているが、対象や実施状況に合わせて、柔軟に計画する。

##### 第1回 オリエンテーション

（目的の理解、赤ちゃんについての事前学習）

##### 第2回 はじめまして赤ちゃん

（2～4ヶ月、赤ちゃんおよび親子の様子をよく観る、気持ちの共有）

##### 第3回 赤ちゃんはなぜ泣くの？

（6～7ヶ月、前回との違い、泣く表現や他人の感情の理解）

##### 第4回 赤ちゃんはなぜ遊ぶの？

（9～10ヶ月、心と体の成長と変化、遊びを通じた発達の理解）

##### 第5回 お誕生日おめでとう

（満1歳ころ、赤ちゃんと自分の成長をふりかえる、協力に感謝する）

1回の展開や時間配分についても、その対象や状況によって柔軟に対応する必要がある。基本的には、中学生などの一斉形態の場合、全体で80分から90分くらいで、以下のような展開例が考えられる。

- ・ 出会いのあいさつ
- ・ ふれあい学習（30～40分）
- ・ さよならのあいさつ
- ・ リフレッシュタイム（5～10分）
- ・ まとめと次回の予習（30分）

#### ⑨プログラム例（自然なふれあいの形態の場合）

学生のボランティア的なふれあいの形態の場合、なるべく自然な雰囲気でのかわりを中心に行う。月に1回で、5回くらいを想定しているが、対象や実施状況に合わせて柔軟に計画する。親子1～2組と学生2～3人のグループを作って行うなどのグループ化して行う方法もできる。

##### 第1回 オリエンテーション

（事前学習、ひろばの様子を知る）

##### 第2回 赤ちゃんとの出会い

（コーディネーターと親子と一緒に赤ちゃんの様子を見たり、抱っこしてかかわる）

##### 第3回 赤ちゃんはなぜ泣くの？（同じ

赤ちゃんとも母親とかかわり、前回との違いについて話し合う。なぜ、泣いているのかを一緒に考える。）

##### 第4回 赤ちゃんはなぜ遊ぶの？

（赤ちゃんはどんな風に遊んでいるのか、何が楽しいのか、自分がどんな風に遊んであげれば楽しいかを、親子にかかわりながら考える。）

##### 第5回 赤ちゃんとも家族とのかかわり

（可能であれば、父親と一緒に来てもらう。父親とのかかわり方の違い、父親はふだん、どのようにかかわっている

のかを知る。また、他の家族や親戚、近所の人とのかかわりについても話す。）

#### 第6回 お誕生おめでとう

(赤ちゃんのこの数ヶ月の変化と、自分の成長を振り返る)

- ・学生のボランティア的な自然なふれあい形態の場合、普通のボランティアのようにできるだけ自然にひろばや親子になじめるように参加してもらい、しばらく、自由にかかわってもらう。(1時間程度)
- ・その後、コーディネーターは学生を集め、そこで感じたことを話してもらい、そこでの疑問や発見について問題意識を持たせる。(30分程度)
- ・さらにその後、その視点を持って、もう一度、親子にかかわる。(30分程度)
- ・最後には、所定の記録用紙に感想を書いて終了する。

#### ⑪フォローアップ

学生にはこのプログラムとは関係なく、ひろばにいつでも来てよいことを伝える。学生の成長にも目を向けたい。

また、継続的なプログラムを通して、赤ちゃんの成長について親子に参加してもらったが、その後も引き続き、その子の成長について話をすることで、親も励みになる。

#### ⑫スタッフ研修・ミーティング

このプログラムにかかわるスタッフは研修を重ねる必要がある。外部の研修が大切なだけでなく、特に毎回のプログラム終了後のスタッフ間でのふりかえりのミーティングを重ねることが重要である。学生や親子がどのように感じていたか、そこへのスタッフのかかわり方や導き方はどうだったか、次回への課題などを具体的なエピソードをあげて振り返ることが必要である。この積み重ねが、子育て支援者としてのスキルアップにもつながる。

#### 留意事項

- ・特に、衛生面についての配慮が必要である。学生は子どもとかかわる前、石鹸で手洗いをする、風邪が流行している時期はうがいもする。また、風邪気味の学生は直接触れないようにするなどが必要である。
- ・赤ちゃんのだっこなどはなるべくさせたいが、赤ちゃんの数に対して、学生数がかなり多いような形態で行う場合は、だっこできる学生数は限定したほうが良い。その夜、赤ちゃんの夜泣きがひどくなるなどして、親が協力を拒否してしまうことは、できるかぎり回避したい。
- ・授乳やおむつがえなどへの学生のかかわりなど、どこまで行わせることが可能かについては、スタッフ間でも事前に検討を行い、協力親子にも納得してもらえるように伝える。
- ・特に、自然なふれあいの形態をとり、小学生などの年齢の低い子どもを対象に行う場合は、十分に目が行き届くスタッフ体制をとることが望ましい。中学生、高校生などの場合でも同様である。ただし、目が届きすぎること、監視体制となってしまう、学生が主体性を発揮できなくなってしまうのであれば、本末転倒となってしまうので、注意する必要がある。

### Ⅲ 3.6)

#### (2)学生ボランティア

##### 趣旨・目的

現代は、少子化、核家族化、地域コミュニティの弱体化等によって、中高生や大学生などの学生世代が乳児とかかわるような機会が失われている。そのことが、若者の内面的な人間形成や次世代の子育て者としての成長に影響を与えている面も少なくない。

また、親子にとっても学生とかかわることの意味は非常に大きい。まだ子育て未経験の学生ではあるが、子どもに純粋に向き合ったり、体を使って遊ぶとする姿勢は子どもにとってもうれしい存在であり、親にとってもありがたい存在である。親世代と学生世代がかかわる場もないため、そのような異世代交流の意味もある。

このことは、今回のアンケート調査でも明らかになったように、学生世代とかかわりが薄い親は学生とのかかわりに肯定感がないが、ひろば内で顔の見える関係の中で学生とのかかわりを持っている親は、学生への期待感が非常に高い。これはつまり、ひろばでの学生とのかかわりが生まれることによって、異世代交流がいかに親子にとって意味のあるものが認識されるのである。

学生がボランティアとしてひろばに入ることは、学生の成長のみならず、子どもにとっても、親にとっても大きな意味がある。ただし、本当に意味のあるものにするためには、工夫を要する。そのため、ここに学生ボランティアプログラムについて提案を行う。

##### 実施方法

###### ①対象

中学生、高校生、短大・大学生、専門学校生など。小学生も考えられる。

###### ②募集

行政機関や学校など、様々な場に広報する。つながりのある学校の教員を通して募集を行うとよい。

###### ③日時・回数

学生の夏休みや冬休みなどの長期休暇を利用したボランティア募集が集まりやすい。できればその間のみならず、普通の日もボランティア募集も行う。特に大学生など多少時間に都合がつけやすい学生の場合、定期的、あるいは時間があるときに来たいという学生もいるので、休み期間にボランティアに来た学生に募集をするとよい。継続的に学生ボランティアを行うことによって、親子にも慣れ親しんだ存在となり、学生自身も学校とはまた別の居場所ともなり、その意味は大きい。

###### ④活動内容

- ・子どもにかかわって遊ぶことが中心となる。赤ちゃんを抱っこするなど、子どもとたくさん触れ合う。
- ・共同作業などの場を通して、親やスタッフ、ひろばにかかわる多様な大人との会話やかかわりが行えるようにする。
- ・学生ボランティアの存在を生かし、手がないと日常的には行えないような外遊び企画、体を使った遊び等を行う。
- ・ひろばでのイベントでの裏方などの作業も手伝ってもらう。継続的に入っている学生の場合、学生の特技などを生かしたり、学生企画を行うこともよい。
- ・ひろばに半日、あるいは一日入ってもらった際には、簡単でも記録（感想）を書いていってもらおう。
- ・ひろば担当者は、学生がいつ、どれくらいの時間ボランティアとして入っていたか、その様子はどうだったかを記録しておく。

###### ⑤コーディネート

学生がひろばのボランティアに入ったら楽しかったと思えるような、ひろば担当

スタッフのコーディネートがとても重要である。このコーディネート次第で、学生が継続的にかかわるようになるか否かが分かれる。

ひろばの場合、保育園などと違い、親子が一緒にいるため、子どもにかかわりにくいという学生の声がある。そのため、子どもに十分にかかわれたり、赤ちゃんをだっこする機会が得られるように意図的につなぐようなはたらきかけが必要となる。また、子どもとかかわっているように見えても、うまくかかわれなかった、泣かれてしまったという経験は学生にとっては大きなショックとなることも少なくない。そのような学生の思いをつかみ、必要なはたらきかけをしていくことが求められる。

また、学生自身がひろばで役に立っていると感じられることが重要である。そのため、学生がやってくれたことに対して、その役割の大きさや感謝を伝えていくことも不可欠である。学生の特技などを生かせる場などがあると、学生にとっても大きな喜びとなる。

継続的にかかわる学生が出てきた場合、学生たちのアイデアを生かしたイベントやプログラムを実施することも考えられる。

#### ⑥研修

ボランティアで入る学生は研修を受けることを原則とする。夏休みなどの長期休暇などの場合は一斉に研修を行う。それ以外での希望者は、随時、必要な留意すべき内容について説明を行う。

研修内容としては、以下のようなプログラムが考えられる。

- ・自己紹介と交流会
- ・乳幼児の理解と具体的なかかわり
- ・ひろばの実際と学生ボランティアの役割と留意事項
- ・反省会

#### ⑦フォローアップ

学生がボランティアに入る中で、どの

ように感じているか、その本音が聞けるような工夫を行う。その中で、学生が困難さを感じているようなことがあれば、対応を行う。

#### 留意点

- ・学生の自発性、主体性が尊重される中で、継続的で体験的なかかわりができるよう配慮する。そのためには、ひろば担当コーディネーターが学生の希望や感想を聞き、主体的に参加できるような方法を模索する必要がある。
- ・子どもや親と学生が十分にかかわれ、信頼が得られるようにするため、コーディネーターはアドバイスをしたり、間をつないだりする。
- ・学生、親子双方に意味があるような相互的な関係を形成するとともに、学生の名前や存在がある程度、スタッフや利用者に見えるような工夫を行う。
- ・学生にとってひろばが居場所となり、主体的にかかわれるようにするために、学生同士の交流が生まれるような工夫をすることや、学生たちのアイデアが生かせるような工夫も行う。
- ・ボランティアの学生がかかわる中での事故やトラブルが起こった際の保険に加入する。また、そのような保険に入っていることを学生にも事前に説明しておく。

### Ⅲ 3. 6)

#### (3) 中高年者ボランティアプログラム

##### 趣旨

時代の流れの中、少子高齢化は進み、いくつもの要因が重なって地域力は大きく低下してしまった。今少しずつ、その失われた地域力をもう一度取り戻そうと動き出している。三位一体の行動計画がどう作成されるのか、地域活動のファシリテーターとして、中高年者の力量が大いに期待されていると思われる。その一策として全国各地に広がりつつあるつどいの広場事業やその他地域の子育て支援の担い手に中高年者のボランティアを導入することを提案する。

地域には、未だ活力を余す中高年者が出番を待っている。中高年者にとっても、子育てで学んだ知恵を伝え、歌い慣れたわらべうたや子守歌などを口ずさんだりする機会を与えられることは非常に有意義なことである。わらべうたや伝承遊び、自然物を使った遊びなど、日本独特な遊びも多い。中高年者にとっても伝える・教える・役に立つ自分を再発見することは、生きがいとなるに違いない。

異世代の交流はエネルギーも、新しい知識をも与えてくれる。高齢者と接する子ども達は、核家族では味わえない人間の幅の広さを自然に感じ、優しい心が育つだろう。親子関係・嫁姑問題の鍵はワンクッション置いた他人の指導が素直に心に入ってくることも多い。指導というよりも、当事者ではない意見が有効に作用する、誰かに聞いて貰いたいということもある。子育て支援関連には男性が入りにくいと言われているが、男性の子育て支援への参画を望みたい。

中高年者は、多くが地域に長く暮らしている人達で、地域での存在感があり、地域への愛着を持っている。中高年者が加わることにより、地域の催しに層が厚くなり、地域作りの核としての存在価値は大きい。乳幼児から若者まで、その出

番を待っている。

後に上げる事例のように形は違っても色々な参加の仕方がある。

##### 実施方法

###### ①対象

子育て支援のボランティアを希望する中高年者。ひろばへのかかわり方は一通りではないが、基本的に親子の支援にかかわるという性格から、子育て支援に関する基礎的な研修を終了した方が望ましい。この研修では、特に現代の親子が置かれた状況と、必要な支援のあり方を理解してもらうことが必要となる。

###### ②内容

ここでは、日常的に親子の支援にかかわる「子育てサポーター」と、「中高年の趣味、特技、キャリアを生かした交流」の2つの交流プログラムを提案する。

###### ○子育てサポーター

基本的には、子育てサポーターとしてひろばのボランティアとしてかかわる。

###### ○中高年者の趣味、特技、キャリアを生かした交流

中高年者の趣味や特技、あるいはキャリアを生かした交流が考えられる。具体的には、以下のような実践例があげられる。

- ・親やスタッフへ折り紙指導
- ・おもちゃドクター
- ・NPO 法人など経営・マネジメント・経理・会計・事務など（プロの会計士）
- ・縫いぐるみ・ドレス作りなどを自宅で作成
- ・工作遊び： 小中学生対象の工作・竹細工・木工の指導など
- ・地域での畑作り：花を育てる・野菜作り・収穫・収穫祭など
- ・料理教室の開催  
親子対象の料理教室  
共に食事をする

- ・和裁・洋裁・割き織り・手編み・生花  
茶道・ビーズ教室など趣味を生かして  
教える
- ・リサイクル品の活用（紙漉などリサイ  
クルセンターなどの活用も）（リサイク  
ルセンター・シニア指導員）
- ・囲碁・将棋教室  
学童クラブ、児童館、地域区民館な  
どで。また、ひろばなどの施設の時  
間外に小中学生や高校生への居場所  
としての活用も出来たらよい。

以上、中高年者のボランティア参加の  
実例を挙げたが、地域における子育て支  
援を強化するためには、健康なリタイア  
後の男性や子育てを終えた女性の参画  
が大きな力となる。

### ③コーディネート

中高年ボランティアや交流がうまく  
機能するためには、ひろばスタッフによ  
るきめ細かいコーディネートが大切と  
なる。以下のコーディネートの視点が必  
要である。

- ・中高年者一人ひとりの思いやよさが生  
かされるような配慮。親子とつないで  
いたり、スタッフともつながりが生  
まれることで、ひろばが居場所のよう  
に思えるようにしたい。
- ・このような交流プログラムにおいては、  
親子にとっても中高年者にとっても、  
互いにとって恵みのあるもの（互惠性  
のある関係）でなければならない。例  
えば、親子にとってはしてほしくない  
ようなかかわりや、中高年者の好意に  
対する親子の無自覚や無理解なども  
よくあることである。そのため、この  
プログラムをコーディネートする担  
当者は、両者の視点に立って、互いが  
満足できるよう関係をケアしていく  
必要がある。世代間の違いがズレとな  
るのではなく、違いへの理解へとつな  
がるような努力が必要となる。
- ・基本的にはイベント化した交流ではな

く、日常的に「～さん」と言った固有  
名詞で呼べる顔の見える関係であるこ  
とが大切である。そうすることで、個々  
の個性が生かされ、本当の意味での交  
流を深めることになる。

### ④フォローアップ

ボランティアを行う中での感想など  
を聞き、その中で改善すべき点があれば  
改善する。また、日ごろのかかわりへの  
心からの感謝を、意識的に申し述べる。

### 配慮点

- ・時代にあった子育て支援の知識や技量  
を再点検する必要もあり、講座修了者  
の導入が望ましい。
- ・ボランティア保険料、交通費等の予算  
化が望まれる。

### Ⅲ 3. 7) アウトリーチ

#### (1) 子育て家庭訪問プログラム

##### 趣旨・目的

子育てに困難を感じながらも、ひろばに出てこない、あるいは出て来られない親子は少なくない。そのような中で、非常に危機的な状況があることを踏まえ、外とのかかわりが持ちにくい家庭に訪問を行うことが求められている。

子育て家庭のリスクの軽減がこの訪問プログラムの目的となる。子育てが密室化せず、外部とのつながりを作ることが最も必要である。安心できる他者が訪問することにより、その訪問者を媒介として、ひろばやサークル、関係機関とのつながりを作り出すことがこのプログラムの目的である。

##### 実施方法

##### ①対象

子育てに困難な状況があると考えられる家庭。ふたご、みつごなどの多胎児家庭、子どもの健康や発達に困難があると考えられる家庭、年子や3歳未満の子が2人以上いる家庭、親の健康上に困難があると考えられる家庭、シングル家庭等が考えられる。

このような家庭を把握するためには、福祉保健センターや様々な関係機関との密接な連携が不可欠となる。

##### ②訪問体制

子育てひろばスタッフが拠点となって行う場合、このひろばが地域の子育てコーディネーター的な機能を持つことが必要となる。地域の様々な関係機関と連携し、情報のセンターとなると同時に、最も必要な資源を提供できる能力が必要となる。そのため、このコーディネーターとなる人材として、十分にふさわしいと認められる方をあてる必要がある。

子育てコーディネーターは、地域の子

育て家庭の情報を取得し、ふさわしい人材に訪問の依頼を行う。このふさわしい人材を得るためには、ケースに対応する上で最もふさわしい団体、サークル、グループとの協力関係が必要である。このような団体等とのネットワークがあつて、はじめてコーディネーターの役割が成立する。ひろばがセンターとなり、多胎児サークルや、支援者サークル等のグループ作り、そのグループと連携しながら実施することも考えられる。

##### ③訪問者

訪問者としてふさわしい人材として考えられるのは、第一には、十分な研修を経てきた子育て当事者（先輩当事者も含む）である。例えば、多胎児家庭であれば、同じ多胎児の親が訪問するなどである。このような当事者が有効であるのは、被訪問者が安心して訪問を受け入れやすいという面がること、実感に基づいた共感的なアプローチが可能であることがある。ただし、専門家ではないため、相談や支援を行う上ではリスクも伴う。そのため、訪問を行う上での研修を行い、基本原則をマスターしてもらう必要がある。（この研修プログラムについては別途、検討が必要となる。）

第二には、特に当事者ではないが、ボランティアを募集して行うことも考えられる。この場合も、十分な研修が必要である。

第三には、ひろばでの電話相談などを行う中で、訪問が必要と感じられた家庭に対して、ひろばスタッフが訪問するケースが考えられる。この場合、ある程度、事前にその家庭が抱えている課題が把握できている。

第四には、専門家による訪問が考えられる。特に困難と考えられるケースには、専門家が行うことが望ましい。ケースによって、保健師、臨床心理士、医師、保育士等が考えられる。

#### ④訪問の実施要領

訪問者は、家庭を訪れ、まずはコミュニケーションをとることが必要となる。安心して話ができることからスタートする。安心感を持ってもらい、つながりを作ることが最大の目的となる。再訪問を受け入れてもらったり、ひろば等に行ってみようかなと思ってもらえるようにアプローチする。単にひろばに誘うよりも楽しいイベントに誘ったり、リサイクル用品を持っていくなどのアプローチも有効である。

また、何気ない会話を通して、子育て家庭の実態を把握することも行う。訪問がきっかけとなり、ひろば等に出てきてもらえれば最もよい。そうでなければ、再訪問を行ったりする。ただし、外に出てくることにあせるようなアプローチは禁物である。あくまでも、その親が必要としている支援に対して応じる必要がある。

#### ④ふりかえり、フォローアップ

訪問の中で特に問題がありそうなケースについては、ケース会議（定期もしくは臨時）を通して、対応を検討する。そのため、ケース会議を行う組織作りが必要となる。その中には、スーパーバイザー的な存在を置くことが望ましい。

特に問題がなさそうなケースでも、再度訪問したりするなどのフォローアップする体制を作る。

#### ④研修

研修には、以下の内容が必要である。

- ・カウンセリングマインド（傾聴のトレーニング等）
- ・訪問にあたっての基本原則の理解（訪問での禁句、話の進め方、有効な言葉がけ、守秘義務、トラブルがあった場合の対応等）
- ・対象理解研修（多胎児家庭、シングル家庭など、それぞれの家庭が共通に抱えている困難さについて理解するための研修）

- ・ケーススタディ（訪問時の様々なケースへの対応の仕方を検討する。）

#### 留意事項

- ・訪問者は、その役割や身分が社会的に証明されるようなものが発行され、訪問時にそれを提示するようなシステムが必要である。
- ・被訪問者がひろばに訪れてからの受け入れ体制や継続的につなげていけるような体制作りが不可欠となる。突然、被訪問者がひろばに訪れたとき、その必要最低限の情報を受け付けのひろば担当者が把握していることが望ましい。
- ・訪問に関する様々な留意事項は研修の中で具体的になされるが、特に守秘義務がともなうものであることの理解が不可欠である。

### Ⅲ 3. 7) アウトリーチ

#### (2) 広報活動

##### 趣旨

様々なプログラムを実施しても、現実には必要としている家庭に届きにくいという問題がある。また、様々な支援が知られていないという実態もある。充実した活動を進めていくということと共に、様々な支援が有効に機能するための実質的、効果的な広報活動が求められている。

##### 目的

広報活動を通して、必要な支援を子育て家庭に知ってもらい、子育て家庭と支援の場を結びつけていくことを目的として実施する。また、子育て家庭のみならず、地域全体に知らせていくことも大きな目的である。

##### 実施方法

###### ①対象

ひろばにおけるプログラムへの参加のお誘いなどは、参加対象となる親子が、広報の対象となる。しかし、ひろばの活動全体や、子育て支援の活動そのものは地域へ広く伝えていくことが必要である。したがって対象者により発信する情報も吟味する必要がある。

###### ②広報媒体

公報紙の利用・メディアの利用（テレビ、ケーブルテレビ、新聞、雑誌、HP、トリガーメール等）

###### ③活動の工夫例

各機関へのチラシ配布（保健所・小児科・公共施設等）といったことはそれぞれのひろば等で工夫、実施されている内容である。その配布物の工夫はとても大切であり、パンフレットのみならず、お誘いチラシやミニカードを作り、だれでもが持ち歩きやすく、配りやすい物をつくることも必要である。

民間の活動であれば、コンビニエンスストアやドラッグストアなど、親子の利用が高そうな場所で配布してもらうことも、一案である。

また、ドアノックとまではいかななくても、地域の自治会、民生委員等とも協力し、個別投函や回覧板といった知らせ方もある。

「この活動を知っていますか?」「参加したことがありますか?」といったアンケート調査も大切で、実際にどのくらい地域の中で知られているのか、きちんと実施側が把握しておくことが大切である。アンケートはそれ自体が広報となることもあり、うまく活用していきたい。

##### 留意点

・ちらしを配るなどの広報活動を行う場合、営利目的の勧誘活動等と誤解されることがないように、どのような立場かがよくわかる名札を付けるなどの工夫が必要である。